

上限水位(計画高水位)は、上げないことが原則

- ・淀川では昭和14(1939)年以降、約70年間、上限水位(計画高水位)を上げていない。
- ・昭和初期からの地下水利用により、大きいところで2m30cmも地盤沈下し(現在は沈静化)、居住地域の地盤高と上限水位(計画高水位)の差は広がった。
- ・橋梁やポンプ場など川に係る施設は、上限水位(計画高水位)で全て設計し、管理している。
- ・堤防決壊時の被害が拡大するため、上限水位(計画高水位)は上げないことが大原則。

淀川には、鉄道橋、国道橋など多数の橋梁が渡っている。

橋の桁下高は上限水位(計画高水位)との関係で決まっているので、上限水位(計画高水位)を上げると橋も架け替えることとなり、川の周辺のまちづくりにも影響を与える。

淀川にある全ての排水ポンプ(15機、総排出量807m³/s)は、淀川の上限水位(計画高水位)を前提に設計されており、上限水位(計画高水位)を上げるとポンプ場も全て造り直さなければならなくなり、多大な費用がかかる。

